

日本におけるドナルド・キーン略年譜〈4〉 2017 - 2019

北 嶋 藤 郷

はじめに

2019年（平成31）2月24日の早朝、戦後の日本文学研究をリードして、〈日本文学は世界の架け橋〉を実践した日本文学研究者・ドナルド・キーンが東京都内の病院で、心不全（cardiac arrest）のため死去した。96歳。多くの日本人・日本文学愛好者にとって、まさに〈巨星墜つ〉の喪失感があるであろう。

正岡子規の句に、〈人の世をさびしくさせて鳥帰る〉や〈帰る鳥帰らぬ鳥もまじりけり〉がある。1971年から、キーンは一年を米国と日本と半分ずつ棲み分けて、二つの母国に生きて、研究生活に没頭して暮らした。筆者には、例えば瓢湖の白鳥のような渡り鳥のイメージをキーンに抱いていた。後になり、先になって群れ飛ぶ渡り鳥ではなく、彼は約半世紀にわたって、ニューヨークと東京を単独飛翔する孤高の渡り鳥であった。

『東京新聞』の「筆洗」（2月25日付）には、上記の子規の一句を引いて「米国の生まれだが、日本を愛し、古巣へ帰らぬ方の鳥だったか」と書いている。晩年、日本国籍を取得し、「帰る国は日本」とも「私は日本文学と結婚した」とも語っていた。

キーンは無神論者で、永眠の地として、函館・立待岬の啄木の墓の近く、フェノロサの眠る三井寺、義仲寺の芭蕉翁の墓と背中合わせの場所に埋葬されるのでもいいな、と語ったことがある。結局、45年間住んだ自宅の近くの真言宗の寺に墓を建立し、そこに埋葬された。

筆者は、彼が永劫の旅に出発の際に、お世話になった新潟県の「ドナルド・キーン・センター柏崎」に立ち寄られたのではないかと推測している。

〈キーン逝く 今こそ光れ 日本海〉は、訃報に接した時わたしの詠んだ一句である。早春の日本海の曙光の中、彼は誰をも包み込むような（時におどけた）笑顔で虚空を優雅に舞って、西方浄土を目指したことであろう、と思っている。

西暦（和暦）年齢・事跡

2017年（平成29年）

95歳

1月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第9回〉で、「新春、無量寺に思う」雑誌『和楽』（第17巻第1号 通巻No.171）小学館。

1月18日、「『勝敗』の感想文 武力行使のない世界を」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『新潟日報』文化14面。

「MOSTLY CLASSIC モーストリー・クラシック」1月号に、“私の魂を揺さぶるベートーヴェン～フィデリオ「エロイカ」のことなど～”（2017年1月号 通巻Vol.236号）

2月11日、「宗教教し国際理解進展 映画『沈黙』を鑑賞」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『新潟日報』文化17面。

2月20日、「MOSTLY CLASSIC モーストリー・クラシック」4月号に、“オペラ人プラシド・ドミンゴ～この歌手と同時代を生きているという幸福～”

2月24日、お互いさま文化 高い教養こそ日本の宝」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『新潟日報』文化12面。

2月25日、デイヴィット・リビング著、仲達志訳『日本一喪失と再起の物語（下）』に、帯（推薦文）早川書房。

2月28日、キーン誠己「職業への悩み 道開く 逆境にめげず日本語一筋」（素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化24面。

3月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第10回〉で、「骨董品との出会い」雑誌『和楽』（第17巻第2号 通巻No.172）小学館。

3月2日、「本県舞台の古浄瑠璃 6月英で『里帰り講演』ドナルド・キーンさんら企画」『新潟日報』記事、社会28面。（新潟県を舞台にした古浄瑠璃「越後国柏崎 弘知法印御伝記」が6月2、3日にロンドンの大英図書館で上演される予定。）

3月5日、「古浄瑠璃 英国との縁」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『東京新聞』総合2面。

3月8日、「本県と強い縁 感慨深く：古浄瑠璃 英国へ」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『新潟日報』文化21面。

3月10日～8月6日「ドナルド・キーンに宿った『センセイ』 恩師、角田柳作の志」（ドナルド・キーン・センター柏崎の2017年度企画展）。

3月10日、島内景二「ドナルド・キーンの恩師、角田柳作『センセイ』の青春」企画展関連講演会が新潟産業大学で行われた。

3月17日、「キーンさんの恩師に光 米大学で日本文化指導 角田柳作」著作などを展示して足跡を辿った企画展（ドナルド・キーン・センター柏崎）『新潟日報』記事13面。

3月31日、山下多恵子「ドナルド・キーン著 角地幸男訳『石川啄木』書評。「国際啄木学会研究年報」第20号、pp. 37-39.

同日、Donald Keene, *The First Modern Japanese: The Life of Ishikawa Takuboku* by Charles Fox (Review) 『国際啄木学会研究年報』第20号、pp. 56-57.

小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクト15 ビゼー：歌劇「カルメン」のプログラム（3月発行）に、“《カルメン》の思い出”。

4月1日、キーン誠己「料理の腕前 器用でないのに上手：心を込め好みに合わせて」（素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化13面。

4月10日、『東洋大学 現代学生百人一首の30年』に、「自由な空気のなかで短歌を詠み、楽しめる世界を」朝日新聞出版。

同日、黒田杏子編著『存在者 金子兜太』（藤原書店）表紙に、本書の推薦者として、日野原重明、ドナルド・キーン両氏の名前が掲載されている。

4月13日、「米百俵の精神 未来ある国は教育」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『新潟日報』文化14面。

4月25日、幻の古浄瑠璃「英でも伝わる」6月上演 尽力のドナルド・キーンさん 曲つけたキーン誠己さん「粗っぱいが親しみやすさ」『朝日新聞』文化・文芸28面

4月28日、キーン誠己「手際良いが大ざっぱ 愛用の料理本はボロボロ」（素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化19面。

5月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第11回〉で、「続・骨董品との出会い」雑誌『和楽』（第17巻第3号 通巻No.173）小学館。

5月19日、埼玉県・草加市が制定する「第3回ドナルド・キーン賞」の授賞式があり、初の大賞は、栗田勇著『芭蕉（上・下）』が受賞した。

5月20日、「日本のよき希薄化憂う：『利己主義』のまん延」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『新潟日報』文化14面。

5月27日、キーン誠己「買い物 地元商店街の人気者 何げない一言が心地よく」（素顔の父 ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化12面。

6月4日、ロンドンの大英図書館にて、「弘知法印御伝記」の里帰り上演を果たす。

「越後絵巻 英国を魅了 古浄瑠璃 ロンドンで「里帰り公演」拍手鳴りやまず」、「現物台本と対面 キーンさん感無量：非常にきれいで、全く時代を感じさせない」『新潟日報』社会27面。

(1962年、日本から英国に渡り世界で一冊だけ残る台本「越後国柏崎 弘知法印御伝記」を大英博物館図書館で、鳥越文蔵早稲田大学の教授が発見。彼は台本をコピーして、日本に持ち帰り邦刻。)

6月18日、『ドナルド・キーン 知の巨人、日本美を語る!』和楽ムック小学館。(本書は、『和楽』2012年2月号から2016年12・1号までに掲載された8回の特集と、2015年1月号からの連載「鬼怒鳴門亭日乗」をまとめたものである。)

6月21日、「復興遅れ『共謀罪』成立」：五輪に紛れて」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化17面。

6月30日、「越後絵巻 英と懸け橋 『里帰り』観客を魅了 ロンドン・古浄瑠璃上演」『新潟日報』特集21面の全面を使つての特集。鳥越文蔵・早稲田大学名誉教授の「『弘知法印御伝記』ロンドン公演に寄せて 困難乗り越え実現 深い感慨」が錦上花を添えている。

7月6日、キーン誠己「ケンブリッジ訪問 心配よ所に散策先導 思い出の地 元気みなぎる」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化12面。

7月25日、「記憶鮮明 二十代の気分 懐かしの地巡る」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化23面。

8月26日、「日本国民は自立したか 72年前の忠告」(ドナルド・キーンの東京下町日記)先月逝去した、コロンビア大学名誉教授のテッド・ドバリーの追悼記事。享年97。『新潟日報』文化21面。

9月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」特別編「ドナルド・キーン先生のロンドン公演奮闘記」雑誌『和楽』(第17巻第5号 通巻No.175)小学館。

同日、キーン誠己「英の“家族”との再会 8年ぶり 話題尽きず 旧友亡き後も交流深める」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化17面。

9月25日、『ドナルド・キーン 日本の伝統文化を想う』別冊太陽 平凡社(日本のこころ—254)本書は美しいカラー写真などを盛り込んだ「ムック」形式をとった書物であるが、初公開資料も含まれる優れた学術書となっている。別冊太陽の『漂白の詩人 石川啄木』などは筆者の愛読書の

ひとつであるが、キーン自身も昔の別冊号は、長年、神田神保町などの古書店を渉猟して、手に入れているらしい。(竹内清乃編集人の「編集後記」参照)

9月25日、「激動する現代に再評価 『徒然草』に見る美意識」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化12面。

同日、「6月に英で公演、本県舞台の古浄瑠璃：ゆかりの柏崎を再び魅了」(ロンドンで6月に行った「里帰り公演」の再演。24日に柏崎市産業文化会館にて上演)(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化21面。

1962年に大英博物館図書館(現・大英図書館)で台本を発見した鳥越文蔵・早稲田大学名誉教授とキーン氏との対談なども行われた。『新潟日報』県内総合24面。

10月9日、キーン・誠己「甘いもの好き子供時代からの習慣 お菓子選びは隠れた趣味」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化面。

10月21日、「先進性ゆえ弾圧うける 賢者・渡辺崋山」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化21面。

11月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」(12回)「唯一、骨董品と繋がる記憶」雑誌『和楽』(第17巻第6号 通巻No.176)小学館。

11月10日、「95歳、今を生きる人 キーンさんに迫る」『新潟日報』文化23面。(制作したBSN放送本部情報センターエグゼクティブプロデューサー・南可乃子氏(62)のコメントも含まれている)

11月15日、BSN新潟放送創立65周年特別番組「ドナルド・キーン95歳 心の旅」(新潟県内：20時～21時57分)放映。特別番組の試写会は、東京・赤坂のTBS放送センター8Fのプレビュー室で、15日 14：30より放映された。

同日、キーン誠己「日野原先生との親交 機敏な動き 印象深く 戦争知る同士 心通じ合う」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化20面。

11月18日、「ケーリ 日本を愛し続け 従軍体験 小説に」高橋義樹(筆名・堀川渾 伊藤整の門下生で『運命の卵』、『硫黄島』などがある。)など日本兵の捕虜のため、ハワイの収容所でドナルド・キーンの提案で音楽鑑賞会を開いたことが掲載されている。『新潟日報』(捕虜になった記者小柳胖たちの戦後)。

11月26日、BSN新潟放送創立65周年特別番組「ドナルド・キーン95歳 心

の旅」(全国放送：13：00～14：57) 放映。(平成29年度文化庁芸術祭参加作品)

11月29日、「日本文学研究 運命の糸今日まで一筋」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化21面。

12月3日、古浄瑠璃「越後の國柏崎弘知法印御傳記」二段、三段(ロンドン公演開催記念・新潟公演)BSN新潟放送創立65周年特別番組「ドナルド・キーン95歳 心の旅」(新潟県内：20：00～21：57)りゅーとびあ劇場(14時開演)

12月4日、「英国魅了の公演 新潟で 本県舞台の古浄瑠璃再演」『新潟日報』地域24面。

〈ロンドン公演について〉ドナルド・キーン×鳥越文蔵：コーディネーター・南可乃子。

〈古浄瑠璃公演「越後國柏崎 弘知法印御傳記」より、二段、三段の上演。〉(かつてキーンの教え子であった、米国ポートランド州立大学教授・ラリー・コミンズ教授の英訳も字幕として放映され、英語圏の外国人の観客の理解にも役立った。筆者の感想は、平明で見事な英訳であったが、ホトトギスをnightingalesと英訳してあったが、日本鶯は、(Japanese) bush warbler と英訳すべきか、と思った。)

12月16日、キーン誠己「続・日野原先生との親交 師匠の三味線託され 早大に寄贈 最適の所蔵先」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化10面。

12月23日、「日本を学ぶ 英語歌舞伎 キーンさん弟子米公演語る」(オレゴン州ポートランド州立大学・R.コミンズ教授が歌舞伎公演について語った。於柏崎ブルボン本社)『新潟日報』記事は、29日に掲載。

12月25日、「日本文学発信の出発点 国際ペン大会」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化9面。

西暦(和暦)年齢・事跡

2018年(平成30年)

96歳

1月1日、連載「鬼怒鳴門日乗」特別編で、「キーン先生95歳の英国紀行、人生を変えた ケンブリッジ編」『和楽』2・3月号(第18巻 第1号 No.177)

1月14日、「両陛下の憲法への思い」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『東京新聞』

1月15日、キーン誠己「散歩と旧古川庭園 自宅の真裏四季堪能 44年前移

り住む決め手に」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化13面。

2月11日、「お互いさま文化の危機」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『東京新聞』

2月13日、キーン誠己「教育者として 大学での講義62年間 教え子との交流 今日まで」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化17面。

2月22日、「平和共に希求 キーンさんコメント」(俳人・金子兜太の死去に際して、俳人と30年以上交友関係にあったドナルド・キーンがコメントを寄せた。)

2月28日、『日本人の質問』(朝日文庫)35年の時を経て名著が初文庫化された。本書では、当時の世相を映す福永友保(朝日新聞東京本社写真部)の写真は、すべて割愛された。

3月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」特別編「キーン先生95歳の英国紀行続編 ジェーンが住まうソールズベリーにて」雑誌『和楽』(第18巻 第2号通巻No.178)小学館。

同日、ニューヨークのメトロポリタン・オペラを鑑賞のために渡米。NYの友人宅に約3週間投宿して、メトロポリタン歌劇場でロッシーニのオペラ『セミラミデ』などを楽しんだ。

3月12日、キーン誠己「散髪嫌い 服も無頓着 なぜか絵になる着こなし」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化12面。

3月25日、ドナルド・キーン『日本人の質問』が「郷土の本」として紹介された。『新潟日報』読書28面。

4月1日、ドナルド・キーン・センターでは、キーンが師と仰ぐ故アーサー・ウェーリ企画展「ドナルド・キーン、倫敦に還る」(4/1～8/12)が始まった。帝京大学の井原眞理子准教授のギャラリートーク。13時半からは、ウェーリの名訳とされる『源氏物語』などについての同氏の講演があった。

4月2日、「キーンさんの原点実感 柏崎 ウェーリとの企画展」『新潟日報』記事。地域22面。

4月13日、キーン誠己「アメリカの象徴 圧倒される2大景観 オペラハウスへ足しげく」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化13面。キーンは、アメリカの象徴を3つ挙げるとしたら、①ナイアガラの滝、②グランド・キャニオン、③メトロポリタン・オペラであ

る、と言っている。

4月14日、北嶋藤郷「『ローマ字日記』は最高峰」ドナルド・キーン『日本人の質問』の書評。『盛岡タイムス』第3面。¹⁾

5月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第13回〉で、「愛される日本料理」雑誌『和楽』（第18巻 第3号 通巻No.179）小学館。

5月6日、埼玉県草加市市制60周年記念行事として、草加市アコスホールにて、ドナルド・キーン、鳥越文蔵、俳人・黒田杏子、キーン誠己の4氏による座談会があった。また、古浄瑠璃「越後国柏崎 弘知法印御伝記」の上演があった。『毎日新聞』のインターネット版では、「古浄瑠璃「幻」の演目キーンさんらの縁で草加で上演」として報道された。なお、江戸時代に松尾芭蕉が深川芭蕉庵を出発して日光街道を北上する「奥の細道」を旅した縁で、草加市には「奥の細道文学賞」がある。2012年から「ドナルド・キーン文学賞」も設立されたが、未だに受賞者を出すに至っていない。

5月12日、「よみがえる戦地の記憶」14年新聞大会で展示 関係文書キーンさんも見学『新潟日報』（捕虜になった記者 小柳胖たちの戦後）。

5月13日、「101歳には負けられぬ」（ドナルド・キーンの東京下町日記）『東京新聞』

5月17日、キーン誠己「米国旅日記上」「最後の故郷訪問」決行（素顔の父ドナルド・キーン……とともに暮らして）『新潟日報』文化11面。

5月18日、キーン誠己「米国旅日記中」101歳の親友と思い出話（素顔の父ドナルド・キーン……とともに暮らして）『新潟日報』文化11面。

5月19日、キーン誠己「米国旅日記下」なじみの歌劇場を満喫（素顔の父ドナルド・キーン……とともに暮らして）『新潟日報』文化11面。

6月15日、キーン誠己「遠慮の名人 文人の申し出も辞退 時に後悔、奏功することも」（素顔の父ドナルド・キーン……とともに暮らして）『新潟日報』文化13面。

6月17日、「花巻出身の三田循司 玉碎に消えた詩魂 太宰と師弟 アツヘ出征 米軍にドナルド・キーン氏」『盛岡タイムス』日刊第一面。

7月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第14回〉で、「甘いものは生活の一部」雑誌『和楽』（第18巻第4号 通巻No.180）小学館。

7月6日、「ドナルド・キーンのまなざし 宮澤正明写真展」内覧会、プレス内覧会 旧古河邸 大谷美術館 1階フロア。時間11:00~16:30。

7月7日~8月5日、「ドナルド・キーンのまなざし 宮澤正明写真展」会場：旧古河邸 大谷美術館 1階フロア。時間9:30~16:30。

7月8日、「東京でキーンさん写真展 飾らない魅力伝える」『新潟日報』

地域23面。

7月10日、瀬戸内寂聴×ドナルド・キーン『日本の美德』中公新書ラクレ624を出版。ラクレ (la clef) とは、フランス語で「鍵」を意味する。時代を読み解き指針を示す「知識の鍵」を提供するという意図があろう。

7月13日、キーン誠己「96歳の誕生日 親しい人と幸福な夜 自身で服装選びおしゃれ」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化11面。1954年以来交流のある北垣宗治・敬和学園大学初代学長も参加して、乾杯の音頭をとった。

7月21日、北垣宗治・敬和学園大学初代学長が、ドナルド・キーンの戦友でもあり、生涯親しい友人でもあったオーテス・ケーリの伝記『オーテス・ケーリの生涯』を完成させた。労作である。その出版祝賀会が、アリス・ケーリ (Alice Cary) 夫人、長女のベス・ケーリ (Beth Cary)、二女のアン・ケーリ (Ann B. Cary)、長男のフランク・ケーリ (Frank B. Cary) など来賓55名を迎えて、京都のウェスティン都ホテルの「鳳凰の間」で盛大に開催された。

7月22日、「教え子 お歌英訳集大成」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『東京新聞』

7月28日、「明治天皇の詠歌 教え子の英訳が一冊に」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化23面。

8月12日、竹石松次「発信続ける著者に感銘」ドナルド・キーン『日本人の戦争 作家の日記を読む』にいがた人の本棚『新潟日報』(読書)30面。

8月17日～12月23日「ドナルド・キーン倫敦に還る」宮澤正明写真展 (ドナルド・キーン・センター柏崎 2018年度後期特別企画展)

8月22日、「キーンさんの業績紹介 柏崎『国性爺合戦』の研究展示」(ドナルド・キーンのケンブリッジ時代を紹介する特別企画展)『新潟日報』地域16面。

8月25日、森澤真理「再評価進む教育者オーテス・ケーリ 原点は捕虜との交流 敬和学園大学初代学長・北垣さんが初の評伝」『新潟日報』オピニオン29面。(オーテス・ケーリは、ドナルド・キーン戦友であり、生涯の親友であった。)

8月26日、「甲子園日本の夏を象徴」(ドナルド・キーン戦友の東京下町日記)『東京新聞』

8月30日、「日本を象徴 夏の風物詩 高校野球」(ドナルド・キーン戦友の東京下町日記)『新潟日報』文化11面。35年前の第65回全国高校野球選手権

大会の折、キーンは甲子園で取材したことがあり、「白たまの消ゆる方に芳夢蘭」という一句を作詠したが、今回はその英訳も載っている。

9月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第15回〉で、「お酒の話」雑誌『和楽』（第18巻 第5号 通巻No.181）小学館。

9月17日、キーン誠己「NYの部屋 柏崎にそのまま移設 名残惜しい窓からの夕景」（素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化9面。

9月25日、2月に98歳で逝った俳人・金子兜太の足跡を辿り、彼の仕事に様々な角度から光をあてた雑誌「兜太 Tota」（藤原書店）が創刊された。ドナルド・キーンや瀬戸内寂聴などが編集顧問に名を連ね、メッセージを寄せている。その中で、キーンは「戦争体験語り部」としての行動に敬意を表します、と語っている。

10月15日、キーン誠己「書画骨董 独自の審美眼で収集 思い出と連動、愛情を注ぐ」（素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化16面。

10月21日、「人形浄瑠璃公演 近松門左衛門作『平家女護島』 鬼界が島の段」など人形浄瑠璃と記念対談—古浄瑠璃をもっと楽しむ講座その一—（ドナルド・キーン・センター柏崎 開館五周年記念講演・公演会 ブルボン統合研修センター）

10月25日、『ドナルド・キーン著作集 正岡子規 石川啄木』第15巻発刊（新潮社）

11月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第16回〉で、「切手の収集」雑誌『和楽』（第18巻 第6号 通巻No.182）小学館。

11月16日、「ドナルド・キーン 日本の心を伝えて～宮澤正明写真展 書籍・映像公開～」(12月22日まで、新潟市・知足美術館)「復活公演の軌跡を紹介」『新潟日報』文化21面。

11月17日、新潟放送総合プロデューサー・竹石松次講演①「江戸時代に海を渡った日本文化」（知足美術館で、午後2時から）

11月19日、キーン誠己「三島由紀夫との交流上 敬意と友情今も胸に 死後48年でも気持複雑」（素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして）『新潟日報』文化19面。

11月24日、「源氏烏帽子折一竹馬、卒塔婆引き」—古浄瑠璃をもっと楽しむ講座その二—（ドナルド・キーン・センター柏崎 会館五周年記念講演会・公演会 ブルボン統合研修センター）

12月1日、竹石松次氏講演②「テレビが伝えたドナルド・キーンさん」

(知足美術館で、午後2時から)

12月17日、キーン誠己「三島由紀夫との交流下 死を覚悟の題辞 浄瑠璃の翻訳本に寄せる」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化12面。

12月24日、「平成は日本の転換期」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『東京新聞』

西暦(和暦)年齢・事跡

2019年(平成31年4月30日まで、5月1日より令和と元号が改元された)

1月1日、連載「鬼怒鳴門亭日乗」〈第17回〉で、「旅」雑誌『和楽』(第19巻 第1号 通巻No.183) 小学館。

1月12日、「平成時代 バブル崩壊 続く停滞感」(ドナルド・キーンの東京下町日記)『新潟日報』文化23面。

同日、「三番叟」「山椒太夫―鳴子曳き―」―古浄瑠璃をもっと楽しむ講座その三―(ドナルド・キーン・センター柏崎 会館五周年記念講演・公演会―古浄瑠璃をもっと楽しむ講座その三―(ドナルド・キーン・センター柏崎 会館五周年記念講演・公演会 ブルボン統合研修センター)

1月19日、キーン誠己「NYでの生活 散歩をかねて買い物 買った食材で料理も日課」(素顔の父ドナルド・キーン……共に暮らして)『新潟日報』文化17面。

2月18日、キーン誠己「NYの思い出 心を奪われる美術館 たびたび訪ね傑作楽しむ」(素顔の父ドナルド・キーン……ともに暮らして)『新潟日報』文化20面。

2月24日、午前6時頃、東京・順天堂病院にて、心不全にて逝去。96歳。筆者は日報記者からの電話で知らされた。まさに「巨星墜つ」の感があり、暫らく呆然とした。

同日、NHK、NHK(BS)をはじめ各民放テレビ局が一斉に彼の訃報を放映した。

同日、テレビ新潟〈夕方ワイド新潟一番第3部〉で「新潟にも深いゆかりがある日本文学研究者ドナルド・キーンさん死去」というタイトルで放映された。2013年の新潟市旧斎藤邸の「ドナルド・キーン展」で会場から庭の紅葉を鑑賞するキーンの懐かしい映像が映し出された。

THE JAPAN TIMES (February 25, 2019) Japanese literature scholar Keene dies at 96

2月25日の『東京新聞』は、1～2面と24面にドナルド・キーンの訃報記

事を掲載した。〈筆洗〉には、子規の〈帰る鳥帰らぬ鳥も交じりけり〉の一句を引いて、「米国の生まれだが、日本を愛し、古巣へ帰らぬほうの鳥だったか」と記述している。2面には、12年10月～18年12月までの「ドナルド・キーンの東京下町日記」連載関連の記事がある。²⁾ 24面には、コロンビア大学留学ときに知己を得た鈴木伸幸記者の「沖縄戦体験 日本の美探る生涯」の記事がある。

同日、『朝日新聞』1面の〈天声人語〉では、作家阿部公房は、新大陸を発見したコロンブスにキーンを例え、「あいにく大陸ではなかったが、日本文学という未知の群島に辿りついてしまった冒険家なのである」と書いている。3面には、「従軍体験が生んだ日本愛」(中村真理子)、21面の「キーンさんを悼む声」(渥美好司)の記事に添えた写真には、国際石川啄木学会の池田功会長と共に、檀上に立つキーンの雄姿がある。

同日、『読売新聞』には、1面、9面、16面、22～23面、28～29面にキーンの関連追悼記事がある。9面には、松浦寿輝の「ドナルド・キーンさんを悼む『橋』の知性 日本と外部結ぶ」の追悼記事がある。同ページには、瀬戸内寂聴「堂々たる謡と仕舞に感嘆」がある。また、22面の瀬戸内寂聴の寄稿「心通い合う親類のよう」は心打たれる文面である。ドナルド・キーン×瀬戸内寂聴『日本の美德』(2018)が絶筆となった。9面には編集委員・尾崎真理子の評伝「豊富な知識 堅固な美意識」という出色の記事がある。

同日、『毎日新聞』には、1面、21面、25面に追悼記事が見られる。「評伝新しい日本観伝える」(中澤雄大)。

同日、『日本経済新聞』1面、35面には、キーンの追悼記事がある。「日本人像追った『一日本人』キーンさん死去 作家と信仰、海外発信」。(35面)

同日、『新潟日報』1面、15面、28面に、キーンの追悼記事がある。「日報抄」は秀逸。

2月26日、『日本経済新聞』1面の「春秋」と文化40面に芳賀徹の「ドナルド・キーンさんを悼む 颯爽とした大秀才」が掲載された。(生身のキーンに芳賀が会ったのは、彼がフォード財団に招聘された際、コロンビア大学でキーンに邂逅。「まだ40代半ばのキーン教授は颯爽と登場し、謡曲古典の読解を指導した」と記している。キーンが駒込霜降橋の近くのマンションに移ってから芳賀との交遊は続いた。)

同日、『朝日新聞』小説家・平野啓一郎(寄稿)「ドナルド・キーンさんを悼む ユーモアと笑顔 憧れだった『友達になりましょう!』差し延べられ

た手」(文化・文芸記事)

同日、『読売新聞』1面の〈編集手帳〉には、松尾芭蕉の終焉の地は大阪御堂筋であり、「花屋」跡の碑を作家司馬遼太郎と訪ねたことが興味深く記されている。3面には、「日本文学の精髓を広く伝えた」の記事がある。

同日、『新潟日報』1面に「ありがとうキーンさん 柏崎で記帳」、16面に「温かいまなざし忘れない」が記載される。

同日、『朝日新聞』「キーン氏逝く 愛情と苦言を残して」(社説)

同日、19:30~21:00 報道1930(6-BS-TBS)「日本を最も愛した米人 96歳ドナルド・キーン 私たちに残したもの」放映。作家平野啓一郎、コロンビア大学の教え子で正岡子規研究家のJ. バイチマン、新潮社編集委員・堤伸輔が出演。1975年、作家安部公房は、「キーンさんはコロンブスの末裔。大陸には上陸しなかったが、日本群島に到達した。」と語ったことがある。

2月27日、『朝日新聞』(夕刊)「はっきりもの言う 偉大な日本の理解者」(ドナルド・キーンさんしのぶ声 大澤征爾・野村万作・志村ふくみ・中西進・徳岡孝夫の諸氏。特に、徳岡孝夫は、キーンが日本永住を決め、日本国籍を取得する時に「アメリカは、国籍を捨てるほどの悪い国ではない」と反対した。)

同日、『新潟日報』5面の社説に「キーンさん逝去 新潟への貢献を忘れない」が掲載された。

2月28日、「日本を励ましたキーン先生」『朝日新聞』「声」(Voice)欄。

3月1日、「鬼怒鳴門亭日乗 第18回 着物」雑誌『和楽』連載、小学館。

3月2日、『朝日新聞』、「キーンさんと『センセイ』と 日本研究巡る交流 高崎で追悼ミニ展示」(加藤修)

3月3日、関口宏の「サンデー・モーニング」でキーンの訃報が放映された。

3月5日、鳥越文蔵「寄稿 運命を呼び寄せた天才 ドナルド・キーンさんを悼む」『毎日新聞』文化12面。早稲田大学名誉教授・鳥越文蔵は、1961年から交遊があった。

同日、「日本人として幸せな人生」として、ドナルド・キーンの養子誠己の「父の感謝の思い語る」の記事がでた。『新潟日報』社会30面。

同日、『朝日新聞』「我々以上に日本を楽しんだ」ドナルド・キーンさん晩年の日々(中村真理子)

3月8日、11時35分~「100年インタビュー『ドナルド・キーン』」が放映された。

3月11日、NSTプライム「追悼ドナルド・キーンさん伝えたい日本文学愛」(16:20~17:00)

新潮社の堤伸輔のインタビューに答えて、三島由紀夫『宴のあと』を翻訳の際、作家に作品中の着物の柄について質問すると、三島は「母に聞いてみる」と答えた、などのエピソードを語った。キーン氏は、日本文学が隆盛を極めたのは、「平安朝」「元禄時代」そして「戦後」と語った。彼は西脇順三郎の詩を非常に高く評価していた。また、啄木の『ローマ字日記』に触れて、啄木は「明治時代末期の人ではなくて、現代人である」と語った。さらにまた、新潟県の佐渡島は文弥節や説経節などがあって興味深い、と語った。

3月13日、「故キーンさんの新刊 愛したオペラ語る」の記事。『ドナルド・キーンのエッセイ』が4月10に発刊予定。『新潟日報』文化10面。

3月15日、北嶋藤郷「ドナルド・キーンさんを悼む 新潟にも多くの遺産 平易な表現で日本文化発信」『新潟日報』文化21面。第一面にも「キーンさんを悼む」が見られる。

同日、瀬戸内寂聴「養子・誠己さんへの愛 言動に」『新潟日報』文化21面。

3月16日、中村真理子記事 惜別 日本文学研究者・ドナルド・キーンさん「ユーモアと笑顔の奥に厳しさ」『朝日新聞』(夕刊)。

3月17日、Asahi Weekly: Reading Comprehension 2月25日付の『朝日新聞』の「天声人語」の英訳と解説。

3月26日、「『追悼企画』96歳珠玉の言葉 瀬戸内寂聴×ドナルド・キーン」『婦人公論』(婦人公論新社) pp. 50-53.

3月28日、「追想 メモリアル」特集11面記事の中で、ドナルド・キーン・メモリアル「被害者への思い常に」がある。

3月30日、松浦寿輝「ドナルド・キーンの世界『日本語と英語の美しい架け橋』」『朝日新聞』。

3月31日、朝日歌壇「戦死せし兵士の日記翻訳し日本人知りし若きキーンさん」諏訪兼位『朝日新聞』11面。

4月1日~7月15日、ドナルド・キーン・センターの「ドナルド・キーン追悼企画展」が開始された。

4月2日、「キーンさんの人柄しのぶ 柏崎で追悼企画展始まる」(ドナルド・キーン・センター柏崎の企画展は7月15日まで)『新潟日報』社会29面。

4月5日、『新潟日報』第一面に「ドナルド・キーン先生 追悼出版企画」として、6冊の書籍が紹介されている。『ドナルド・キーン 知の巨人、日本美を語る!』（和楽ムック）小学館、『ドナルド・キーン自伝』増補新版（中央公論新社）、『日本を、信じる』（中央公論新社）、『百代の過客 日記にみる日本人』（講談社）、新刊『ドナルド・キーンのおペラへようこそ! われらが人生の歓び』（文藝春秋）『別冊太陽 ドナルド・キーン 日本の伝統文化を想う』（平凡社）。

4月6日「考え抜き決定 反応は? 新刊の題名」（ドナルド・キーンの東京下町日記）最終回『新潟日報』文化25面。

同日、同紙面、キーン誠己「戦時中に絆 平和を願う 沖縄」（素顔の父ドナルド・キーン……とともに暮らして）最終回。

4月7日、藤生京子「キーンさんの人間観に思う」『朝日新聞』社説「余滴」。

4月10日、ドナルド・キーンの「お別れの会」（13:00~14:30）が東京・青山葬儀所で盛大に営まれた。

〈日本の皆さんに感謝を込めて一鬼怒鳴門〉という副題の付いた「お別れの会」は、午後一時から、新潮社編集部・堤伸輔の司会で、滞りなく執り行われた。冒頭には、小澤征爾指揮の「カルメン」第一組曲が流され、長年の友人・鳥越文蔵の弔辞では、「晩年は無料で講演を引き受けてもらうなど私が助けてもらっていた」と語った。出色の弔辞は、作家平野啓一郎のものであり、ほのぼのとした彼一流のユーモアは、キーン先生譲りのもののように聞き取れた。発起人代表は、コロンビア大学で教え子のディヴィッド・ルーリー氏であったが、発起人には先生の教え子6名が名を連ねていた。その他、東洋大学学長・竹村牧男先生のお姿もあった。文学や古典芸能の関係者、教え子らキーン氏と交流のあった約1500人が献花に参列した。キーンが生前大好きであった枝垂桜と竹と白菊で祭祀壇は飾られ、その中央には穏やかにほほ笑む遺影があった。

同日、『ドナルド・キーンのおペラへようこそ! われらが人生の歓び』文藝春秋社から出版。（1945年6月2日に、キーンが沖縄で散髪してもらっている貴重な写真なども含まれる。p. 47）

4月11日、「キーンさんお別れの会」の記事。『新潟日報』社会31面。

同日、中村真理子「キーンさんお別れ 希望通り、日本の土に」『朝日新聞』

4月13日、BSN放送TV「追悼キーン先生~新潟ロンドン心旅~ 寂聴語る思い出 青春のケンブリッジ大学」（13:50~15:00）。

4月17日、「キーン氏のローマ字日記評」第108回啄木忌が、盛岡市洪民の宝徳寺で開催され、国際啄木学会会長の池田功氏が、「石川啄木の日記と手紙の魅力を読み解く」と題して講演した。『盛岡タイムス』第6面。

同日、芳賀徹・東京大学名誉教授「故ドナルド・キーンさん 自由闊達で知的な一生」日報紙の一面すべてを使って、「新潟との絆いつまでも 晩年ほど足跡多く」「ドナルド・キーンさん年表」などの記事も盛り込まれている。『新潟日報』特集11面。

4月21日、BS-TBS特別追悼番組「ドナルド・キーンが遺したもの」(ブルボンカルチャースペシャル) 16:00~17:00に放映された。

4月29日、連載①「キーンが遺したもの 古浄瑠璃に光 復興の旗印」『読賣新聞』27面。

4月30日、連載②「キーンが遺したもの 文学研究 日本兵日記から」『読賣新聞』27面。

5月1日、第126代新天皇・徳仁(なるひと)陛下即位、平成に幕 令和時代の幕開け。

同日、「鬼怒鳴門亭日乗 第19回 続・着物」(最終回)雑誌『和楽』連載、小学館。

同日、連載③「キーンが遺したもの 『米百俵』魂の翻訳 海渡る」『読賣新聞』27面。

5月3日、連載④「キーンが遺したもの 『私の全て』心通い親子に」『読賣新聞』27面。

5月4日、連載⑤「キーンが遺したもの 日本永住 柏崎に書斎再現」『読賣新聞』25面。

5月5日、朝日歌壇「キーン氏の人柄思う時鳥の聞きなしユニーク『ゲンコウデキタカ』」鯉渕仁子、『朝日新聞』7面。

5月18日、堀部篤史が薦める「文庫」この新刊ドナルド・キーン著『思い出の作家たち』、『朝日新聞』。

5月30日、朝日文庫『このひとすじにつながりて』(私の日本研究の道)キーンは96年という長い生涯に4冊の自伝を残したが、うち3冊は英語で書かれ、後に和訳されている。本書は1993年に朝日新聞社から金関寿夫訳で出版された自伝の初の文庫化。

6月2日、『ドナルド・キーンのおペラへようこそ!』の書評者・梅沢精『新潟日報』読書20面。

6月4日、西原和美「柏崎でキーン先生しのぶ」『新潟日報』「窓」5面。

7月8日、森山恵子「キーン先生偲ぶお茶会燕飛ぶ」(柏崎・キーンセン

ターの行事として献茶が行われた際の吟)「日報読者文芸」『新潟日報』文芸9面。

8月14日、「日記でたどった日本人の戦争」(『日本人の戦争』の中で、日本作家の日記を引用している)NHK第一の夜の番組にて放送。

9月14日、「キーンさんを慕い2万人 柏崎の「センター」来館者」(2013年9月のオープンから6年で、「ドナルド・キーン・センター柏崎」の来館者数が2万人となった)『新潟日報』地域18面。

9月23日、「100年前の英語版を新訳 全4巻完結に称賛の声」(英国の東洋学者アーサー・ウェイリーが、約百年前に手掛けた英訳本『源氏物語』の魅力は、ドナルド・キーン少年を日本文学に引きずり込んだ一書だが、この度、詩人の毬谷まりえさん、詩人の森山恵さんの姉妹が改めて現代日本語に訳出した)『新潟日報』文化12面。

9月26日、『ドナルド・キーンの東京下町日記』が東京新聞より発刊された。(キーンが『東京新聞』に掲載した70篇が収録されている。)

9月27日、NYのコロンビア大学で、「ドナルド・キーンのお別れの会」が開催され、キーンの教え子や交流のあった約200名の人々が参列した。

9月28日、「日本を愛したドナルド・キーン—私たちに残した言葉」NHK総合、朝7:25分頃に放映された。

9月29日、「キーンさんの功績に思いはせ」(27日、キーンの母校コロンビア大学で、教え子らの偲ぶ会が開催され、約220人が集まった)『新潟日報』社会28面。

10月14日、第142回「日報俳壇賞」が決まり、黒田杏子・選の佳作に、「キーン先生偲ぶお茶会燕飛ぶ」(森山恵子)が選ばれた。「柏崎のドナルド・キーンセンターでのお茶会でしょね」と選者はいう。健吟を祈る。『新潟日報』文芸23面。

11月16日、「文学紹介 功績大きく 故キーンさんに特別栄誉賞 NY日本商議所」(ニューヨークに拠点を置くNY 日本商工会議所は、キャロライン・ケネディ前駐日米大使も功労賞受賞者のひとりに選んだ。)『新潟日報』社会30面。

〔註〕

書評：ドナルド・キーン著「日本人の質問」（朝日文庫）¹⁾

1982年、作家司馬遼太郎の薦めで、朝日新聞の客員編集委員となったキーンは、『日本人の質問』と題された連載を始めた。「お刺身を召し上がりますか」「外国にも義理人情がありますか」などの定番の質問に、時に戸惑い、時にうんざりしてきた著者が、そこから見える日本人の精神構造や文化を彼一流のユーモアを交えて分析した日本人論。絶えず質問攻勢にあってきた外国人としての実体験と、日本文学研究40年の日本文化に対する深い洞察から、知的好奇心の旺盛な日本人の姿を浮き彫りにしている。戦後の日本の目覚ましい発展は、知識欲と縁が深い。質問のお相手をさせられるガイジンの中には、疲れはてて、「死んでも日本人相手の教師になりたいくない」という人も出てくる。

本書の構成は、I～IVに分かれ、「日本古典文学の特質」「無知が生む反日感情」「仏教と国民性」などは、興味深く味読した。「明治の日記」では、日記が発達して一流文学となったのは、日本だけの現象であろう、と規定し、明治文学の傑作として、子規、一葉、啄木などの日記を挙げ、明治日記文学の最高峰である啄木の『ローマ字日記』は、一般の読者に知られていないようである、と結論づけている。また、『弘法大師請来目録』を読む^{けい か あじや り まんだら}では、日本から唐に渡った空海に、師僧・恵果阿闍梨が曼荼羅密教の教義を彼に伝え、「自分が日本人として生まれ変わったら、今度は空海の弟子になろう」と言う。何という素晴らしい美談であることか。

本書は、日本文学研究の第一人者であるキーンが、よく尋ねられる質問を話の糸口にしながら、日本人について日頃思っていることを記したエッセイ集であるが、彼の自伝としても読める。当時の世相を映す写真は割愛されているが、朝日選書として発刊された名著が、35年の時を経て初文庫化されたことを喜び、新鮮味が些かも古びない本書が、再び江湖の喝采を博すことを希望している。周知のようにキーン氏は、6月で96歳を迎えるが、まだ矍鑠^{かくしやく}として健筆を振るっている。3月1日には新潟市出身の養子を帯同して、メトロポリタン・オペラを鑑賞のため、ニューヨークに出かけた。

（『盛岡タイムズ』2018.4.18 掲載 敬和学園大学名誉教授・北嶋藤郷）

²⁾2019年2月25日付の『東京新聞』によれば、「東京都北区在住のドナルド・キーンさんが、暮らしの中で感じたことをつづる連載『東京下町日記』は、キーンさんが日本国籍を取得して7カ月後の2012年10月に始まっ

た。昨年2月に、ご高齢のキーンさんの体調を考えて、随時掲載としたが、それまでは月一回の連載。24日に亡くなるまで、69回続いた。『平成は日本の転換期』と見出しが付いた昨年12月24日付けの朝刊が連載の最終回となった。(三品信)」と記録されている。

『東京新聞』の連載「ドナルド・キーンの東京下町日記」は2012年10月6日に始まり、毎月、原則として第一日曜日にコラムを掲載。2012年は3回、2013年以降は12回、順調に掲載された。しかし、2018年と2019年は、高齢となったキーンの体調を考えて随時掲載となった。この年は6回。12月24日の「平成は日本の転換期」が絶筆となった。まる6年間にわたって健筆を振るった。

一方、『新潟日報』は、2014年6月17日から「ドナルド・キーンの東京下町日記」の連載が始まり、キーン氏の死去により、2019年1月11日付の記事で連載は終了した。その後、4月6日付の同紙で「最終回」として掲載があった。まる3年目で、合計48回掲載。))

2017年 (No. 53~64)

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1月14日「『勝敗』のない平和こそ」 | 2-5「異質ではない日本」 |
| 3-5「古浄瑠璃 英国との縁」 | 4-9「米百俵 何よりも教育」 |
| 5-5「利己主義という醜」 | 6-11「五輪の闇 恥じるべき」 |
| 7-9「イギリス留学 20代懐かしむ」 | 8-12「色褪せぬ72年前の警告」 |
| 9-11「徒然草に見る美意識」 | 10-8「賢者・華山に権力の弾圧」 |
| 11-19「日本文学研究の運命」 | 12-10「日本文学伝えた国際展」 |

2018年 (No.65~70) この年は、計6回が掲載された。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1月14日「両陛下の憲法への思い」 | 2-11「お互いさま文化の危機」 |
| 5-13「101歳にはまけられぬ」 | 7-22「教え子 お歌英訳集大成」 |
| 8-26「甲子園日本の夏を象徴」 | 12-24「平成は日本の転換期」 |

2019年 (キーン没後に、最後のコラムが掲載された)

- | |
|------------------|
| 3-31「考えぬいた題名、さて」 |
|------------------|

日本文学・文化を世界に発信した伝道者—D.キーン氏を悼む—³⁾

ドナルド・キーンさんは1953年、京都大学に留学して以来、米国と日本の二つの母国で棲み分ける生活をして、日本文学・文化史に関わる書物を毎年のように発刊した。彼は講演者としても著名で、日本の47都道府県の

すべてを網羅・巡歴して、その名は夙に知れ渡っていた。芭蕉の研究者らしく旅を愛して、新潟県は一番多く足を運んでいる県のひとつ。佐渡の古典芸能に魅せられた彼は、56年から5～6回は訪問した。「佐渡ぶんや紀行」の掉尾には、彼の一句「罪なくも流されたしや佐渡の月」が添えられている。

キーンさんと本県に絞って焦点を当ててみたい。佐渡出身の老政治家に材を求めた三島由紀夫「宴のあと」は63年に、山本有三「米百俵」は98年に翻訳出版された。同年、長岡市国際親善名誉市民となった。詩人西脇順三郎は、数回ノーベル文学賞の候補になったが、キーンさんは推薦者のひとり。西脇の「旅人かへらず」の冒頭部分の英訳は秀逸である。2010年、新潟市主催の「安吾賞」を受賞し、「文化のかけ橋」という演題で講演した。親友の丸谷オ一は「歴史的感覚」という祝辞を残した。

東日本大震災を機に、キーンさんは日本国籍を取得して東京に永住する決意を固めた。2009年7月11日、説経浄瑠璃「弘知法印御伝記」が新潟市で上演された。また同日、会津八一記念館を表敬訪問した。13年には、キーンさんの功績を讃えて、「ドナルド・キーン・センター柏崎」が開設され、ニューヨークの書齋と膨大な書物が移された。同年、新潟市立中央図書館と旧斎藤邸で、企画展「ドナルド・キーン展」が開催された。柏崎名誉市民（14）となった。

キーンさんと新潟日報とも深い縁があり、ハワイの捕虜収容所では、捕虜だった小柳胖元社長と交流があった。戦友のO.ケリー「ジープ奥の細道」（53）には、同社長との新潟再会が活写されている。メディアシップ出航記念講演会では、「私と新潟」（13）と題して講演し、会津八一や坂口安吾への思いを語った。また、日報みらい大学（13）では、古浄瑠璃の誕生を解説し、全国新聞大会記念講演会（14）では、新聞の魅力は地域に関係した視点が重要であると強調した。

敬和学園大学の開学記念講演「日本文学はなぜ面白いのか」（91）では、「徒然草」第7段を引いて、美意識と普遍性を語った。また2000年10月、同大学10周年記念講演は、「私の大事な場所」（05）に収録されている。この時、同大学から名誉文化博士号が贈られた。

キーンさんは無神論者で、永眠の地として、函館・立待岬の啄木の墓の近く、フェノロサの眠る三井寺、義仲寺の芭蕉翁の墓と背中合わせの場所に埋葬されるのもいいな、と語ったことがある。結局、45年間住んだ自宅の近くの旧古河庭園に隣接する桜の美しい真言宗の寺に墓を建立した。

キーンさんの美德のひとつは、決して難解な表現を使わないことであ

る。彼の辞書に、「韜晦」という言葉はない。1970年代から知己を得た筆者は、彼からたくさんのご教示を賜った。ある日、新潟市で「良寛遺墨の精粹」という訳書を贈ったことがある。「良寛の崩し字はとても難解ですね」といった、あの時の温顔が今も忘れられない。

(『新潟日報』2019.3.16 掲載 敬和学園大学名誉教授・北嶋藤郷)

ドナルド・キーンと司馬遼太郎^註

作家司馬遼太郎とキーンのある対談集の序文で、軍務体験もあった司馬は、「あの戦争を共同体験したという意味においてお互いに戦友であったという以外はない」といつている。

そもそも二人は敵味方に分かれていたのだから、「戦友」という突拍子もない表現を使っているのに違和感をもつむきもあるであろう。しかし司馬は、「日本文化という一個の世界からみればあの戦争がなければこの文化はドナルド・キーン氏という天才を所有することができなかったであろう」と記している。太平洋戦争は、キーン少年をして日本語を学ばせるという運命に引きずり込んだ。彼の長い日本文学研究生活の歳月を思うとき、筆者は齋藤茂吉の短歌を想起する。この歌は、茂吉が伊藤佐千夫という師を失った直後に詠まれたもの。燃えるような初秋の光の中に一本道が続くのを見た茂吉は、それが自分の進むべき道だと気づいた。茂吉は自分のこれからの生涯を西行や芭蕉のように、歌に捧げるものとして見たのであろう。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

In glaring sunlight

A road without a fork

Lies straight before me.

This, I know, will be my life,

As long as I live.

キーンが司馬遼太郎といつ邂逅したかは定かではない。記憶力抜群のキーンもわからない、という。おそらく、司馬が産経新聞京都支局で記者として働いていた頃、京都でインタビューを受けたかもしれない。1971年、中央公論社の企画で、平城京跡で行われた「対談」から交遊が始まる。3回の対談は、『日本人と日本文化』として結実した。

1982年、二人は朝日新聞主催のあるシンポジウムに参加した。終了後、全員が料亭に移り、食事と豊富な日本酒が振舞われた。朝日の編集局長もキーンと遠からぬ席にいた。宴たけなわの頃、普段より多めに美酒をきこ

しめした司馬が、部屋の反対側の席からこちらへ近づいてきて、かなりの大声で「朝日新聞はよろしくない！」と局長に言った。誰もが驚いて彼を見た。続けてかれが言うには、「明治時代の朝日もよろしくなかったが、夏目漱石を雇うことで、よい新聞になった。今日の朝日をよい新聞にする唯一の道は、ドナルト・キーンを雇うことである」(“In the Meiji Period the *Asahi* was no good, but by hiring Natsume Sōseki it became a good newspaper. The only way to make the *Asahi* a good newspaper now is to hire Donald Keene.”)

全員が笑い声をあげ、司馬のこの発言は酔余のことと受け流したのだが、一週間ばかり経った頃、驚いたことに朝日新聞から客員編集員としての仕事を委嘱された。キーンはこれを引き受け、朝日との10年に及ぶ幸福な提携が始まったのである。

松尾芭蕉が51歳で客死したのは、大阪市の中央区の南御堂筋前にあった花屋仁左衛門の仮座敷であった。最期が迫った時、弟子たちから「辞世は？」と問われると、翁は「平生即ち辞世なり」、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」と応えたというが、正確に言えば芭蕉には辞世句というものとは存在しない。そもそも生涯風雅に身を削った俳聖・芭蕉は、「一句として辞世ならざるはなし」と言っている。

ともあれ、キーンと司馬の二人の間のほのぼのとしたエピソードを紹介しておきたい。それは大阪で、新書版『日本人と日本文化』のための3回目の対談があったあとで、「このあたりは、たしか芭蕉の終焉の地でしたね」と、キーンが切り出した。司馬はかばそい記憶を頼りに、御堂筋のあちこちをひっぱりまわして、やっとその碑を見つけて、「ありましたよ」というと、キーンは「そうですね」と眩きつつしゃがみこんで碑面に顔を寄せた。司馬はマッチを何本か擦って、わずかな明りを彼のために提供した。キーンの芭蕉研究に司馬が役に立ったことと言えば、この何本かのマッチの火だけだった。(“Ah, here we are,” I said, to which Keene murmured, “Indeed.” He knelt down for a closer look, and I lit several matches to provide some feeble illumination—my only significant contribution to Keene’s Basho studies.” From *The People and Culture of Japan* tras. by Tony Gonzalez.)

キーンは司馬を評して、「きわめて珍しい人です。人が彼について悪口をいうのを聞いたことがありません。どんな分野、どんな立場の人でも司馬さんの人格を褒め、尊敬の念を示します。私もその一人です」と司馬の人柄を称賛している。